



これは



種蒔の棊たねまき、くがり



和本浩子



算学塾の講義に使っている組屋敷の一間で、鴻之丞は十代の若者たちを相手に、学問の進み具合を見てやっていた。塾生の多くは庄屋とか畔頭くわがしらといったこのあたりの有力な農民の子で、そろそろ元服しようかという年ごろの少年たちだ。

書棚には塾生たちが手に取ることを許された書物が積んであり、巻末になかなかの達筆で、本を借りるときの心得がしたためてある。

「ようし、今日はこれまで」
鴻之丞が声をかけた。

「ありがとうございます」
声変わりしかけのしゃがれた声と、まだ甲高い子どもの声が混じった。塾生のうち何人かは教科書を風呂敷に包み、

挨拶をして出て行った。

残った少年たちは顔を見合わせ、目配せし合っていたが、やがて一人が膝を進めて出席簿を改めている鴻之丞に近づいた。

「お尋ねします」

「なんじゃ」

「先生は暦を作ることができますか」

てっきり算学の疑問だと思いい、気安く耳を傾けた鴻之丞は一瞬黙った。

「暦と言うたか？」

「はい。天文方のお役人が作っちゃうような、月と太陽の動きを正確に予測した暦を、先生も作ることができますか？」
「できるも何も、それはしっちゃあならんことだ」